

日時

2014年 **4月27日** (日)
12:30~13:30

会場

パシフィコ横浜 会議センター
第5会場 (313+314)
横浜市西区みなとみらい1-1-1

尋常性痤瘡患者に対する 十味敗毒湯(桜皮配合)の 臨床効果と作用機序

座長

横浜市立大学大学院医学研究科
環境免疫病態皮膚科学 教授

相原 道子 先生

演者

医療法人社団智徳会
志木駅前皮膚科

竹村 司 先生



尋常性痤瘡患者に対する 十味敗毒湯(桜皮配合)の 臨床効果と作用機序

演者

医療法人社団智徳会 志木駅前皮膚科

竹村 司 先生

十味敗毒湯は化膿性皮膚疾患などの適応を持つ医療用漢方製剤である。出典の違いにより桜皮(ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Siebold(バラ科))配合と、樺そく(クヌギ *Quercus acutissima* Carruthers(ブナ科))配合のものが存在するが、これまでの使用経験から、女性の尋常性痤瘡に対しては桜皮配合の十味敗毒湯が奏効すると考えている。今回演者は、女性の中等症以上の尋常性痤瘡患者を中心とし、十味敗毒湯エキス製剤の内服と外用抗菌薬(克林ダマイシンリン酸エステル製剤)併用による治療効果を検討した。その結果、投与期間12週の炎症性皮疹の累積改善率は77.3%であり、調査薬剤による副作用は見られず両者の併用療法は臨床的有用性が認められた。

また桜皮配合の十味敗毒湯の作用機序を推定する目的で、桜皮および樺そくの水抽出エキスをを用いて皮膚線維芽細胞からのエストロゲン分泌作用を測定したところ、桜皮は17 β -エストラジオールの顕著な産生を認めたが樺そくでは認められなかった。これらのことから、桜皮配合の十味敗毒湯エキス製剤が尋常性痤瘡の皮膚局所においてエストロゲン産生を誘導することにより、テストステロンを拮抗的に抑制することが作用機序のひとつとなることが示唆された。

これらの結果はすでに論文にまとめ西日本皮膚科Vol.76(2),2014に掲載されたものだが、その後特に治療が困難であった症例に対して十味敗毒湯の1日投与量を1.5倍に増量した結果、更なる改善が認められており、今回はこの検討結果も併せて紹介する。

【略歴】

1960年 日本大学医学部卒

1966年 日本大学医学部大学院卒、皮膚科学教室入局

1971年 大宮赤十字病院皮膚科部長

日本臨床皮膚科医会南関東山静支部長、
日本皮膚科学会評議員、日本乾癬学会評議員など歴任

2001年 志木駅前皮膚科院長

現在に至る